

第30話 藤原氏の出世

先祖の鎌足が大功を建てて以来、藤原氏は引き続いて朝廷から特別のご信任を得ていたが、その後、皇室とのご縁も深くなり、清和天皇が九歳で御位に即かれるに及んで、ついに摂政となって政治を執るようになった。

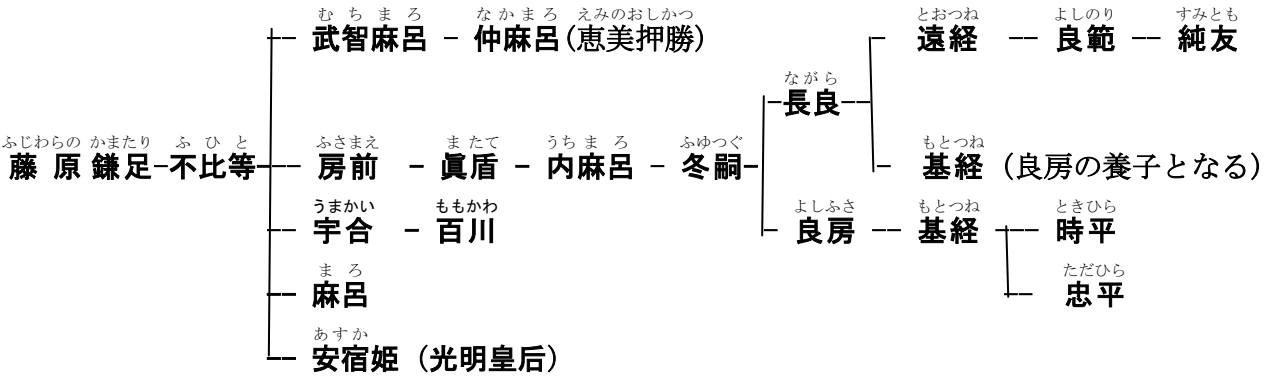
平安時代の初めの頃は、朝廷のご威光が頗る盛んで、政治もよく整い、上下共に泰平を楽しんでいたのですが、間もなく藤原氏が独り勢力を振るうようになるにつれて、次第に朝廷のご威勢が衰え始めました。

藤原氏の先祖の功績

藤原氏は先祖の鎌足が中大兄皇子を輔けて蘇我氏を滅ぼし、大化の新政を行って大功を建て、其の子の不比等も大宝の律令を定めるなどして朝廷に忠義を尽くしたので、不比等の子は四人共に揃って公卿に列せられるという風で、奈良時代から既に朝廷のご信任が厚かったのです。

殊に不比等の娘の安宿姫が聖武天皇の皇后（あの名高い光明皇后）となって、孝謙天皇をお生み申してから、皇室とのご関係もいよいよ深くなり、その家もますます栄えて、世間からも一層重んぜられるようになっていた。

これは平安時代になって、不比等の子の房前の曾孫に当たる冬嗣に至って更に大いにあらわれ、其の子の良房の時から非常な出世をするようになりました。



藤原良房は鎌足の七世の孫で、左大臣冬嗣の子です。父の冬嗣は、桓武天皇の御代の末に左衛士尉というごく低い官から仕えはじめたが、後に、嵯峨天皇の特に厚いご信任を受けて、蔵人頭となり、続いて大納言となり、右大臣となった。お政事の上に殊に功労が多かったので、天皇は皇女を子の良房に降嫁せしめてその功を賞せられた。冬嗣は次の純和天皇の御代に左大臣となり、其の娘は仁明天皇の女御となって、第55代文徳天皇をお生み申した。

良房の出世

さて良房は、仁明天皇の御代から右大臣になっていたが、天皇がお崩れになって、文徳天皇がお立

第30話 藤原氏の出世

ちになると、彼は天皇の外伯父に当たる上に、更に自分の娘を天皇の女御に奉ってもいたので、其のご信任が最も厚く、数年の後には一躍して太政大臣に任ぜられた。

一体この太政大臣という役は、非常に貴い役ですので、古来、皇族の方が任ぜられることになっていて、それも適当な人がいなければ欠員のままにしておいてもよいことになっていたのです。道鏡のように無道でわが儘をした特別の場合の外には、曾て臣下で此の官に任ぜられたものはなかったのです。良房がひとたび任ぜられてからは、藤原氏の人々はきまって此の官に任ぜられることとなりました。

人臣、摂政の始め

しかし、良房の出世はこれに止まらなかった。間もなく文徳天皇がお崩れになり、良房の娘のお生み申した皇子が僅かに九才でお立ちになって、第56代清和天皇となられると、外祖父に当たる良房は摂政となって、天皇に代わって政治を執ることとなった。

勿論、これまでも、天皇がご幼少であるか、或いは女帝の場合などには、摂政を置かれて、御母や皇太子が、(例えば応神天皇の御代の神功皇后や、推古天皇の御代の聖徳太子のように、)それに当たられることはあったが、臣下で摂政となった例はまだ一度もなかったのです。

実に良房は、臣下にして太政大臣となり、また摂政ともなった始めです。それに、僅か九才の幼帝がお立ちになったということも、応神天皇はお生まれになった時から天皇であらせたと全く特別な一つの場合の外には、わが国には未だ曾て例のなかったことで、此の時が初めてであります。

後にはこれが例となって、まだお年の幼いのに立って天皇となられ、そうまで年をとられない壮年時代に早くも御位を譲られるということがたびたびあったが、これは全く藤原氏が摂政となって、自分らに都合の好いように政治をしようという策略から出でた事なのであります。

これたかしのう 惟喬親王

現にこの清和天皇の時にしても、御父の文徳天皇には此の清和天皇の上に三人の皇子があって、わけでも第一の皇子の惟喬親王は最も賢明でいらしたので、文徳天皇ご自身も内々は此の皇子をこそ太子になさろうとおぼしめされていた。

しかし、惟喬親王の母が紀名虎の娘でありましたから、藤原氏に対して言い出すことをご遠慮なされているうちに、良房の計らいで、良房の娘のお産みになった第四の皇子の惟仁親王(後の清和天皇)を立てて皇太子となさることになったのです。其の時、惟仁親王はお生まれになって僅かに九ヶ月のご幼年でしたのです。

惟喬親王の失望なされたことはいうまでもないでしょう。惟喬親王は、其の後は世の中の事を思い絶って、摂津の水無瀬宮に閉じ籠っておられたが、後には、終に御髪を剃って僧となられた。比叡山の麓の小野の里に隠れるようにして住んで、詩や歌に御心を委ねておられました。

ありわらのなりひら 在原業平

藤原氏の勢いには天皇でさえもご遠慮なされたくらいの時ですから、都の役人などはもとより皆その

第30話 藤原氏の出世

ほうに媚びて、親王の事などは全 く見て見ないふりをして冷淡に過ごしていましたが、ただ紀名虎の子の**有常**と**在原業平**とだけは、しばしば此の淋しい隠れ家を訪ねて**惟喬親王**をお慰め申し上げた。

在原業平は**平城天皇**の皇子**阿保親王**の第五子で、兄の**行平**と共に**在原**の姓を賜って御臣下となったのですが、官は右近衛中将までのぼったので、世に在**五中**将と呼ばれています。平安時代の歌人として最も聞こえている一人です。早くから**惟喬親王**に仕え、**水無瀬宮**においでの際は、春の桜狩などにもお供をして、共に歌を詠んで興じ合ったこともありました。

世の中に絶えて桜のなかりせば 春のころはのどけからまし
というのなども其の一つです。

或る雪の日に、小野の里に親王をお訪ねして、墨染の衣に身をおやつしになっているのを見ると、思わず涙を流して、

忘れては夢かとぞ思う 思いきや 雪ふみわけて 君を見んとは
と歌って嘆息したこともありました。言葉の外に明らかに藤原氏の跋扈を憤っている心持がみられるではありませんか。彼にはまた、

思うこと いわでぞただに 止みぬべき、われとひとしき 人しなければ

(訳注： 思っていることをただ言わなければ良かった、私と同じ考えの人はいないのだから)

という歌などもあり、心には大いに世の様を憂いていたが、世の人が皆藤原氏の勢力に圧倒されて、彼と心を同じくする者の全くないのを慨いていたともいわれています。

基経の出世

さて、**清和天皇**は、ご成長の後に、御兄を踰えて御位に即かれたことを心にお愧じになって、まだ27歳という若さで早くお位を皇太子にお譲りになった。これを第57代**陽成天皇**と申し上げます。御母は右大臣**藤原基経**の妹で、**二條の後**と申し上げたお方でありました。**陽成天皇**もまたお年が九才でしたから、**基経**が**摂政**に任ぜられました。

基経は**良房**の兄の**長良**の子ですが、**良房**に子がなかったので、養子となって彼の後を嗣いだのでありました。翌年、**基経**は太政大臣となり、又、其の翌年には位も従一位と進みました。此の出世の早いことは古今に例がないといわれています。

彼は斯うして**摂政**となり、太政大臣となって、政治をしながら天皇のご成人を待っていましたが、不幸にも、**陽成天皇**は御自分で政治をなさることなど逆も出来ないような御病気に罹られたので、**基経**は天皇を廃して**陽成院**にお遷し申し、**文徳天皇**の御弟を迎えて第58代**光孝天皇**としました。御母は**基経**の母の妹でありました。

光孝天皇は此の時既に55歳で、もとよりご賢明でもあられたのですから、当然、政治はすべてご自分でなされてもよかったのですが、**基経**が天皇をお立てした功勞を思われて、なお暫く一切の政治を彼にお任せになっていました。

第30話 藤原氏の出世

ところが、^{こうこう}光孝天皇は^{ざいいわづ}在位僅かに四年で^{かか}重い病氣にお罹りになりましたが、其の時にはまだ皇太子が^{さだ}定まっていませんでした。^{しんちゆう}天皇の御心 中では、第三の皇子の^{さだみ}定省親王を立てたいとおもっておられたのですが、此の皇子の御母は^{かんむ}桓武天皇の御孫に当たるお方で、^{まご}藤原氏の^{むすめ}娘ではなかったものですから、言い出しかねておられたのです。

そのうちに^{わる}天皇のご病氣はいよいよ悪くなったので、或る日、^つ基経は皇太子に就いてのおぼしめしをお尋ね申し上げた。^{たづ}天皇は此の時にもなお^{えんりょ}遠慮なされて、^{かんが}基経の^{むね}考 えにまかせる旨を仰せられると、^みさすがに^{さつ}基経も御心 をお察し申したもののか、「^{さだみ}定省親王をお立て申すことにいたしましょう」と申し上げた。^{おうじ}実際また此の皇子が最も^{ごそうめい}御聡明で、^{すぐ}優れておいでもあったのです。

^{こうこう}光孝天皇は心から^{まんぞく}ご満足におぼしめして、間もなくお崩れになり、皇太子が御位に即かれました。
^{うだ}これが第59代^{うだ}宇多天皇であります。

^{かんぱく} 関白の^{はじめ} 始

^{そくい}ご即位の事情が既に^{じじょう}斯ういう訳でありましたから、^{うだ}宇多天皇もまた非常に^{わけ}基経を重んぜられて、御年は21歳でいらしたにもかかわらず、^{れい}ご即位の禮が終わると、間もなく特に^お詔^{とく}りを下して、「天下の政治は大小となく皆太政大臣に^{だじょう}関^{あずかり}白^{もう}して^{しかる}然^{のち}る後に^{そうげ}奏下せよ」と仰せられた。

^{かん}関も^{ぱく}白も共に^{もう}申すという意味で、^い即^{すなわ}ち、「政治のことはすべて太政大臣^{もとつね}基経に申して、其のさばきを^う受けよ」とのお言葉なのです。^{かんぱく}これが関白の名の始まりでした。^{のち}此の後、藤原氏は、天皇が^{ようしょう}ご幼少の間は^{せつしょう}摂政となり、^{せいじん}ご成人の後には^{かんぱく}関白となって、朝廷の政治を思いのままにするのをならいとしましたが、^{れい}其の例は^{じつ}実にここに^{ひら}開かれたのであります。

ついでに話しますと、摂政といい関白といっても、名はちがっていますが、^{つかさど}其の^{はな}掌^{はな}るところは全く同じで、ただ天皇のお年によって其の^{しよく}職^{しよく}の名がかわるだけです。^{あわ}後にはこれを併せて^{せつかん}摂関ともいいました。^{しよく}此の^{のぼ}職^{のぼ}に昇るものは、^{かん}官^さはたとえ^う左大臣であり、^{だじょう}右大臣であつても、太政大臣の上に^{くらい}位^{くらい}することになっていましたから、又、^{いち}一の人ともいい、^{ひと}一般の者は^{たつと}尊^{でんか}んで^{しょう}殿下と^{しょう}称していました。

(第30話 ^{ふじわらし}藤原氏の^{しゆつせ}出世 終わり。 次は一旦前頁に戻り、

第31話 ^{すがわらみちざね}菅原道真の^{せいちゆう}誠忠 へ)